巨大津波襲来による病院機能壊滅

（内山哲之、日本集団災害医学会誌 17: 4-8, 2012）

2015 年 1 月 30 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

東日本大震災で発生した大津波は、石巻市立病院を襲い 1 階を大破水没させ、備蓄食料の多くと自家発電装置を失わせ病院機能を壊滅させた。院内に手術中断患者を含む患者 150 人、患者家族・職員ら合わせて約 480 人が孤立したが、通信手段が完全に絶たれ、被害状況を発信する方法すら失った。翌日状況を確認したはずの自衛隊、警察の情報も正確に伝達されず、自力で職員が市役所本庁へ出向いて DMAT への救助要請が通った。

筆者は津波の発生時、担当患者の胃の全摘術を行っていた。津波の影響で手術室はすべての照明が消えて真っ暗となり、モニターとレスピレーター、薬液ポンプがなんとか稼働しており患者の生命維持だけは可能という状態であった。筆者は緊急閉腹を行い手術室の外にでて初めて病院の外の異変に気がつたという状況であった。今回の地震では石巻市立病院は三日間外部との連絡を絶たれ、二名ほどで市役所に向かい救援を要請することにした。瓦礫とヘドロだらけの道を歩き市役所についたが、情報が食い違っており救援はもう病院についているのではないかということであった。このため筆者は無線通信機を持ってもう一度病院にもどり救援が到着していなかったことを確認すると、改めて救援を要請しドクターヘリが飛来し担当患者の再手術を派遣された DMAT の医師と行った。再手術の後は、入院患者を病院から脱出させる作業が始まり、被災から 4 日目にして全患者の脱出を確認し、5 日目に全職員の避難が完了した。

今回起こった東日本大震災での石巻市立病院の被災について考察する。この地震の津波で病院が被災した理由に立地の悪さがある。この病院は添付資料にあるように海沿い立地し、かつ周辺よりも標高が高くないため二階部分までが水没してしまった。しかし、病院から数百メートル離れた高台にある住宅がほとんど被害をうけていなっかたことからも立地選択が悪かったことが伺える。地震発生時、備蓄していた食料を 1 階部部分においていてため水没で大半がだめになってしまった。また自家発電機も 1 階部分においていたためすべて破壊されて通信装置が使えず、危険犯して外部に直接連絡を取りに行くことになってしまった。災害医療の観点から、病院自体が機能しないもしくは危険であるということはあってならないため、石巻市立病院は建設の段階から立地、耐震構造、水没した際に患者が入院している病棟が安全な位置にあるかどうか、見直す必要がある。幸い現在、石巻市立病は今回の被災の反省をいかし新たな病棟を建て替え中である。

現在は電子カルテであり病院によっては大きな設備も必要であるから、今回の震災を気に津波や地震、火災などすべての災害時において出来るかぎり病院が機能するようにしておくこが必要だと考える。